

# 町医者だより

<発行・お問合せ先>

おおわだ内科呼吸器内科

院長 大和田 明彦

市川市南八幡4-7-13

シャポール本八幡2階

JR本八幡駅南口(シャポール改札口)

2分ミスタードーナツ並び

ヘアサロンAsh向かいビル2階

電話 047-379-6661

おおわだ  
内科  
呼吸器内科

令和04年07月08月合併号

## Treatable Traits

いきなり英語です。気管支喘息や肺気腫（COPD）の分野でここ数年出てくるようになったのがTreatable traitsという言葉です。製薬会社GSKのサイトにある文章を勝手に引用すると「Treatable traits」とは、最適な治療を提供するために配慮すべき患者の形質・特徴で、「Traits（形質・特徴）」には、臨床的な症状の特徴だけではなく、その背景にある原因や生理学的特性、分子生物学的な病態機序など、さまざまな要素が考えられ、患者によりその要素の有無や組み合わせは異なるとしています。今回はTreatable traitsに関する話です。

### 対象になる呼吸器疾患

GSKのサイトを見ると（検索すると日本語はそれしか出てこない）、COPD（Chronic Obstructive Pulmonary Disease：慢性閉塞性肺疾患）、喘息、さらに、両者の特徴を併せ持つACO（Asthma and COPD Overlap：喘息とCOPDのオーバーラップ）を対象にしています。これらCOPDと喘息、ACOが「閉塞性換気障害」という共通する呼吸機能障害を有することから、「閉塞性肺疾患」として同様の疾患と捉え、その特性、すなわち「Treatable traits」を見極めることの重要性は高いとしています。あれ、どこかで書いたことがある言葉です。調べてみると町医者だより平成27年（2015年）10月号の「喘息とCOPD（肺気腫）の境界線」というタイトルの記事に喘息とか肺気腫（COPD）とか区別せず「閉塞性肺疾患」で良いのではないかと記していました。実はこの考え方は「オランダ学説」に基づいているのですが、これを書いた当時はその存在を知らず、その後の平成28年1月号に「喘息とCOPD（慢性閉塞性肺疾患）の接点」というタイトルでオランダ学説を知ったと記しています。

### すでに挙がっているtreatable traitsの候補

肺に関係するだけでも「気流制限」とくに「固定化した気流制限」「好酸球性炎症」「好中球性炎症」「喀痰分泌」「small airway dysfunction」など多々あります。日本でも臨床研究が進行中のようです。

### 呼吸器内科医消滅の危機？

Treatable Traitsの結論はまだ出ていませんが、思うにシンプルなTraitsが残っていく可能性が高いのではないかと考えています。一つはおそらく患者さんの「症状」です。呼吸器系では「咳」「息苦しさ」でもしかしたら「痰」も候補に残ります。もう一つは「採血結果（好酸球数とIgE）」です。この二つに集約する可能性があります。つまり呼吸機能検査やインピーダンス検査や呼気NO測定などの検査は不要になる可能性があります。考えてみるとバイオ製剤の治療の適応は喘息の増悪回数と末梢血好酸球数やIGE値だけで決めています。呼吸機能は見えていません。こうなれば呼吸器内科医でなくても治療できます。さらにいうと今後は閉塞性肺疾患の治療は関節リウマチや潰瘍性大腸炎やアトピー性皮膚炎をも治療する臨床免疫科といった診療科に集約していく可能性が高いと思っています。そしてそれを一つの形としてすでに実践しているのが大阪大学の呼吸器・免疫内科学です。